

## 「次」の大きな問題

：アリストター・マクグラスの「大きな質問」：なぜ我々は科学、信仰、神について話すのを止めることができないのか、に関連して

ディヴィッド・カールソン

韓国清心神学大学院名誉教授

### 序論

統一原理と統一思想は科学と宗教の関係の問題、特にそれらの和解が一見不可能に見えることを非常に深刻に受け止めている。これは科学と宗教が「和解できない」ものであつてはならないからである。もしそれらが真に和解できないものであるとすれば、世界の将来は非常に暗いものであろう。統一原理と統一思想の立場は、人間の努力のこれらの二つの分野が「統一する」か、または一つの全体的な世界観として統合することが必要であるということである。このことは、何を意味するか、そしてこの統一は何をもたらすか、さらにそこから派生する意味は何か、を論じることがこの論文のテーマである。このことに照らして、「次」の大きな質問は以下のことである。宗教で理解されているような神についての概念が科学と宗教の真の統一の不可欠の一部であるということが受け入れられるか、又は可能であるか？それとも、この壮大な統合を達成するためには神の概念を除去する必要があるか？本論文はまた、「新しい無神論」に対する必要な批判を提供する。この重要な課題の議論を始めるために、科学と宗教という二つの分野の意義を考慮することにしよう。

### 科学と宗教の分野の意義

統一原理とその哲学的な表現である統一思想の両者とも科学と宗教の分野が人間にとって重要であることについては明確である。

「人類は宗教を通して内的真理探究の道を辿り、また科学を通して外的真理探究の道を辿ってきた。宗教と科学はそれぞれの分野において、無知を征服して知識を獲得するために真理を探究する手段であつてきた。」(1)

知識を獲得することの重要性は何か？我々が知識を追究するのは、幸福を得るためである。真理の探究という点で、宗教と科学は両方とも現代人の生活において非常に重要であるように思えるだろう。正にそうである。人間にとって自分が生きている宇宙についての、宗教及び科学の充分にして完全な知識を獲得し、また、充分で完全な生活を送り幸福を得るためには、科学的知識と宗教的（精神的な）知識の両方を含む統一された観点を持たなければならない。しかし、我々は一つの問題に直面している。今日、知識が発展するにつれて、現在理解されている科学と宗教がお互いに両立しないように見えることがしばしばある。

## 科学と宗教に取り組むに際して直面する問題

「宗教と科学は人間の二つの側面の無知を打開する使命をもって出発したが、発展の過程において互いに矛盾し和解できない様相を呈してきた。」(2)

「発展の過程において」と「立場」を取ることは、この二つの人間の努力の間の関係を考慮するにおいて探究すべき重要なテーマである。科学と宗教のこれまでの発展と、現在の発展しつつあることは重要ではない。その上、結局は矛盾するように見える立場を取って終わるかも知れない。後で、私は一人の学者が科学と宗教間のこの一見食い違いに見える点を解決するために説明する洞察を紹介する。彼の洞察は正確な評価で重要であり、究極の統一を達成する道を開くものであるかも知れないと私は信じる。まもなく私はこの点について議論するつもりである。

科学と宗教には、観点、参考資料、方法論、真理の基準などに関して、多くの相違点があることは周知の事実である。科学は長くその分野を支配する権威を保持してきたし、宗教に対するある程度の蔑視を抱いてきた。「科学」は何でも説明することができるし、ほとんど何でもなすと我々はほとんど信じるようになってしまった。」(3) 他方、宗教は科学よりもっと長い間、科学的「発見」を疑問視することがしばしばあった。ガリレオに対する教会の態度を想起するだけで十分である。もっと一般的には、例えば、

「科学の発達に伴って、人間の知性は高度に啓発されたものになり、現実を理解するのに科学的なアプローチを要求するようになった。他方、宗教の伝統的な教義には科学的説明が欠けている。すなわち、内的真理と外的真理の現在の解釈は一致しない。」(4)

物事は「科学的」であることが必要だと強調する現在の風潮は、宗教における「非科学的」な状況を問題視する。統一思想では次のように述べている。

伝統的な宗教の徳目は、科学的な思考方式をもつ現代人にとって説得力を失っている。伝統的宗教の教えは科学と矛盾するか、又は、科学と関係ないものであるとき、科学に絶対的な信頼をおく傾向のある現代人にとって受け入れられなくなるのである。(5)

このような科学的「分裂」は宗教にとってジレンマとなる。解決する必要があるジレンマである。科学と宗教が「同意しないこと」は、事実である。前述したように、多くの相違点がある。疑問はなぜそうなのか、どうしてそのようになったのか、ということである。その理由は「現在の解釈」という語句と多くの関係がある。こうした解釈が、特に、理解が発展しつつある点から見ると、問題になってしまっている。さらに、

「万人が宗教を今すぐ必要と感じているわけではなく、わずかな例外的な人々が急速に精神的知識を獲得するにすぎない。大部分の人にとっては、精神的成長はゆるやかな過程に留まる。このことは、宗教が世界中に広範囲に広がっている今日においてすら、人々の霊的レベルは古代人と大差ないという事実を見ても、理解できる。」(6)

「他方、誰もが物質世界に関する知識を大いに高めた科学の諸発見について良く知っている。科学は実際的なことを取り扱うので、誰もが科学の必要性を強く感じている。かくして、物質世界に関する人類の知識の増加は一般的に広範囲で急速である。さらに、宗教の研究対象は無形で超越的な原因の世界であるのに対して、科学の研究は結果世界の有形な物質世界の物質である。このため今日まで宗教と科学は理論的に和解できないままである。…このような撰理的な観点から見ても、宗教と科学は発展過程においてしばしば変化し、対立するのは明白である。」(7)

議論に役立つように、私はアリストター・マクグラスの「大きな質問」：何故我々は科学、信仰、神について話すのを止めることができないか。」と題する最近の著書を部分的に参考にすることにする。私は、この題目が非常にタイムリーで意味深いものであると思う。確かに、我々は科学、信仰、神について話すのをやめることができない。私はこれらの論点についてほとんど毎週友人たちと議論してきた。かくして私はこの本が科学と宗教の全体的な問題点を議論するのに非常に適しているのを知ってうれしく思う。マクグラスが科学と宗教の(究極的な)和解に向かう実質的かつ理論的な歩みをしているように思われるからである。本論文の趣旨と同じく、マクグラスは「科学は確かに観察可能なことに自己を限定している。しかし、このことは果たして科学の世界を超えて存在するものは何もないことを意味するであろうか?」(8)という疑問を提起する。これは非常に重要な質問であり、誰もが、特に科学者は真剣に受け取る必要がある。それにもかかわらず、私はそれに答えることができると信じる。彼の疑問に対する私の即答は、いや、科学の世界を超えるものは存在しないことを意味するものではない。事実、科学の世界を超えるものは多く存在する。まもなくもっと深く答えることにする。

### 世界観の統一が必要である。科学と宗教の観点は、一つの大きな統一へと統合する必要がある。

科学と宗教の観点は統合する必要があるだけでなく、一つの「より高度の」大きな統一に、あらゆるレベルの考えられる限りの人間の考えや、気持ち、経験を説明することができる包括的な世界観に統合される必要がある。どんなレベルであれ、もし何か説明できないものがあれば、我々が求める「壮大な統一」は実際には達成されなかったことになる。人生の具体的な現実、宗教、政治、経済を通して展開されるが、それらの具体的な現実をより詳しく見るならば、我々のディレンマはもっと激しくなる。宗教、政治、経済はすべて科学と宗教にある程度影響される。統一原理は大胆に主張する。「宗教、政治、経済の道が合流し、神の理想を実現するためには、宗教と科学を完全に統合することのできる新しい表現の真理が現れなければならない。」(9) 「神の理想」とは何を意味するかについては議論しても良いであろう。しかし、今のところは、一つの定義を提示して、神の理想とは人々が幸福でいることができる世界、紛争や戦争がない世界と言わせてほしい。定義は別にして、要するに、物事を見る新しい物の見方が必要であるということであり、それが真理の新しい表現であると考えることができよう。

「宗教、政治、および経済の三つの側面はそれぞれの発展経路を通して別々に進歩してきた。それらがどのようにしてある時点で一つになることができるであろうか？この別々の発展の根本原因は、人類の精神的無知と物質的無知を克服しようとする努力たる宗教と科学の分離であった。」(10)

科学と宗教は分かれた道を歩んできたが、その理由は主として異なる観点の故であった。この点をより詳細に考えれば、科学と宗教の統一は単に理論的または学究的な問題であるだけでなく、統合に関連する政治と経済を含む非常に実際的な関心事に連結している問題でもあることを理解することができる。明らかに、科学と宗教が「統一」することは単に学問的な関心事であるだけではない。その必要性は神の理想の実現、すなわち、完全に新しい文化、真の愛の文化の実現に関連している。統一原理はその「芸術論」において、「この理論の目的は世界に新しい文化を創造し、確立することに貢献するためである」、と述べている。(11)

科学と宗教には長い「紛争」の歴史があったことは事実であるが、今やそれらの統合の必要性が最も強く感じられている時であることは、人間がより良い生活を送るのに助けになるだけでなく、創造の始めに神が構想された世界、貧困など数多くの社会問題は言うまでもなく、戦争や紛争の無い世界を実現するためにも極めて重要である。さもなければ、我々は自らを破滅させて終わるかもしれない。「神」や「創造の初め」について語ることは、完全に宗教的なアプローチであるように聞こえるかも知れないが、科学が環境汚染、犯罪、戦争兵器など、悪化しつつあるように見える今日の諸問題のすべてを解決するための実用的な手段を提供するのに必要であることを否定することはほとんどあり得ない。そのような問題を解決するためには、科学と宗教が互いに力を合わせ、または「完全に一致して」対処する必要がある。科学は技術的な専門知識を提供できるし、宗教はそれらを導くことのできる価値観を提供できる。これは人間の道徳、倫理、芸術と大いに関係がある。問題を解決するためにそのように努力を結集することは、本当に感銘を与え、人類のための非常に必要とされる業績となるであろう。

「究極的に宗教の道と科学の道が統合され、一致して協力することでそれらの問題は解決されるはずである。真理の内外二つの側面は完全に一致して発展するはずである。」(12)

人類が二つの面の無知を完全に克服して、本心が願う善を実現するためには、歴史のいつかの時点において、宗教と科学を和解させ、それらの持つ諸問題を統合した取り組みの中で解決できる新しい真理が現れなければならない。」(13)

かくして、純然たる学術的な思索と作業を超えて、我々は全く新しい世界観、ここでは「新しい真理」の探究を導き、科学と宗教の間の紛争のように見える問題に新しくかつ新鮮な心で取り組むべき観点の必要性を見出す。新鮮で新しい世界観が必要である。何故なら、科学と宗教の統一という非常に高い目標を達成できるいかなる世界観も現在のところ存在するようには思えないからである。

また、別の次元の問題もある。科学と宗教を結合させることができる前に、科学が何らかの一体感を達成する必要がある。また、これは諸宗教についても言えることである。宗教

も何らかの一体感を持つ必要がある。確かに、科学の側では、統一が非常に望まれる業績であるが、そのような統一をもたらすのに役立つのは何であろうか？ Rev. Sun Myung Moonによって開始された I. C. U. S.（科学の統一に関する国際会議）は、この方向への重要な前進であった。これらの会議において、Rev. Moon は諸科学の統一の必要性を宣言したのであるが、統一は絶対的価値に基づくべき統一のことであった。価値に基づくこの提案は宗教を考える道を切り開く。しかし、ここでも我々は方程式の反対側に直面する。様々な宗教の「問題」および宗教統一の必要性である。宗教が「究極の関心」たる価値を取り扱おうとすれば、これはさらに難しい問題であるように見えるであろう。諸宗教の統一を達成するチャンスはあるか？ 神観があるキリスト教から非有神論の世界観である仏教まで、それはほとんど不可能であるように見えるだろう。ここでも Rev. Moon がイニシアチブをとって、世界宗教会議を主催し、絶対的価値を推進した。絶対的価値は、「新しい真理」又は「絶対的真理」の観念に連結している。

宗教の統一は科学の統一よりさらに難しい問題であるように見える。現代社会は急進的なイスラム教のテロのまぎれもない恐怖に直面しているが、これは「アベル型」に対する「カイン型」のイスラム教と呼ばれる分派によるものである。これは銘記すべき重要な区別である。現在の状況はイスラム教、キリスト教、ユダヤ教の間に莫大な摩擦を引き起こしている。もうひとつの問題は、イランや北朝鮮を含む多くの国によって“核武装化”の競争が行われていることである。科学と宗教が一つの壮大な総合に統合される必要性があるひとつの非常に重要な理由は、人間文化の将来の生存可能性が事実上その統合にかかっているからである。今日の世界には伝統的文化を破壊して、自己の文化を押し付けようとする勢力が働いている。一つの例は、シャリア法のジハード的解釈である。1958年に Rev. Moon が、「共産主義が崩壊すると、その精神はアラブ世界に行って、再び西洋に反対するだろう」と主張したことを想起させる厳しい現実である。これは我々が現在、急進的なイスラム教の聖戦テロの中に見ていることである。もう一つの脅威は電磁気による汚染の攻撃である。科学が(宗教からの)価値観の導きなしに発達するとき、技術が破壊的な目的のために使用される可能性がある。我々の文化が危機に瀕しているのである。

「文化」の概念は統一思想では非常に重要である。統一原理では、宗教は文化の基礎であると主張する。しかし、統一思想ではさらに、芸術が文化の本質であると主張する。芸術とは、単に絵を描くことや彫刻ではない。芸術は人生において中心的なものであり、互いに関係して生きる人生のあり方である。統一思想において、芸術と倫理(家族倫理)は親密に連結している。我々は哲学的な芸術論の要素を考えなければならない。

文化とは様々な人間活動の全体のことであり、経済、教育、宗教、科学、芸術が含まれるが、最も中心的なものは芸術である。言い換えれば、芸術は文化の本質である。しかし、今日の芸術は民主主義国、共産主義国、あるいは先進国、発展途上国を問わず、世界的規模で退廃に向かう傾向を示している。退廃的な芸術は退廃的な文化を生む。そのような環境において、文化は全世界で衰退せざるを得ない。(14)

どのような新しい観点が科学と宗教の統一をもたらすことができるか？

「科学的方法」に従うに際しては、先ず、「理論」を策定し、次にその理論を何らかの手段の実験を通して試験する。洞察、イルミネーション、インスピレーション、「箱から出て考えること」、すべてが「科学の前進」に役割を果たすことができる。この意味で、「新しい真理」は、単純に新しい世界観、世界を見る新しくて新鮮な方法であり、我々の経験である。宗教においても、「事物を見る新しい方法」は、しばしば人々を一体化するのに役立つことができる。

そのような理想化された方法で科学と宗教の統合をもたらすことができるかもしれないものは何か？ 科学と宗教の統一が必要であり、この統一は新しい視点、新しい観点、正に「新しい真理」だと単純に主張することを超えて、私は、統一思想がそのような観点の最善の候補であり、科学と宗教を統合する道を具体的に整えることができるということを論じたい。

統一思想は新鮮で新しい観点である。意義深いことに、これには原存在者たる神の理路整然とした観念が含まれているが、それでいてそれは私たちの現実の経験に照らしてテストすることができるものでもある。これは科学の要件の一つであり、本論文の著者が何度も Dr. Sang Hun Lee (李相憲先生)から繰り返して聞いたことである。

しかし、科学と宗教の合流の過程には一つの必要なステップがあり、そのステップとは科学の、特に事物を「見る」方法の「拡大」である。また、それは科学者が自分の研究する現実について抱く態度をいくらか変えることも必要とするだろう。歴史的に、科学は絶えず発達してきた。「ルネッサンスの時代以来、人間社会のほとんどあらゆる面において驚くべき発展がなされてきた。正に、ルネッサンスは「現代世界を建設するための原動力になったのである。」(15)

事実、ルネッサンスに続いて、「イデオロギーにおける二つの傾向と科学の進歩に続く経済発展の路程はその後の世界を政治的に「民主主義世界と共産主義世界」の二つの陣営に分断する原因となった。」(16) ここで、私は社会発展における科学の役割について短いコメントをしたい。我々は現在、「第三次産業革命」を期待しているからである。それは「原子力の安全な発展によって花咲き、理想世界の快適な生活環境を建設するであろう。」(17) 高度に発達した科学の専門知識や能力によって我々は多くのことを達成することができるであろう。

「精神文明と物質文明は宗教と科学の上に築かれたものであり、…調和しなければならない。その時はじめて、我々は人生の根本的な諸問題を解決して、神の理想の世界を実現することができる。キリストが実現するために来られる世界では、科学が高度に発達するであろう。それは最高レベルの文明を持つ社会であり、すべての文明が…復帰されるであろう。」(18)

この論文で私はいかなる種類の拡大された「政治」の議論にも立ち入りたいとは思わないが、歴史の発展における科学の発達の重要性に注目するのは意義深いことである。科学は発達するにつれて変化し、新しい疑問を尋ね、新しい分野を調べ、そして、新しい証拠を追究する。そうしたことを継続して行う。科学の発展の「終わり」を想像する

ことはできない。ある時点で、我々は物理的宇宙のすべてについてほとんどあらゆることを理解することができるようになる可能性は高い。しかし、もっと多くのことがある。私が以前にそれとなく言及した問題は以下のことである。

今まで科学の研究は内的な原因の世界を包含したことがなく、外的な世界に限定してきた。本質の世界を含まず、現象の世界に限定した。しかし、今日の科学は新しい局面に入りつつある。現象の外的結果の世界から内的原因の本質の世界へと、見つめる対象を引き上げることを余儀なくされている。科学は原因的精神的な世界についての理論的説明なくしては究極の目標を達成することはできないことを科学界は認識し始めている。(19)

この探究、すなわち原因的精神的な世界の理論的説明は、本論文で扱われている「次」の大きな質問の意義深い一部分である。見つめる対象を引き上げ、原因の世界を調べることができる点まで認識を広げることが科学に課せられる。この論文が論じることは、統一思想の世界観はそのような原因の世界の理論的説明の最も有望な候補であるということである。それは論理的で、包括的で、一貫性のある観点を提示することができるし、最も重要なことに、科学と宗教の二つの領域のどちらにも違反しない。統一思想は科学を中傷するのではなく、擁護する。統一思想は将来の探索のための道を示し、実験的設計のためのアイデアを提供するという意味で科学を導くことすらできる。おそらく最も重要なことに、絶対的価値の枠組みを提供する。特に、科学は宗教分野から来つつある益々多くの証拠を説明しなければならない。科学と宗教の純然たる一体化を超えて、新しい価値観が必要とされるのであるが、それは科学と共鳴するためだけでなく、科学を正しく導き、新しく関連する研究領域へと導き、探究の新しい道を照らすためであり、すべては人間の生活をより良きものとし、あらゆる文化を高めるためである。統一思想は次のように述べている。

この新しい価値観は、第一にすべての宗教と思想体系の根本的な教えを擁護することができなければならない。また、唯物論と無神論を克服することもできなければならない。さらに、科学を擁護し、導くことさえもできなければならない。… 統一価値観はそのような価値観を提示しようとするものである。(下線は著者が加筆)(20)

科学と宗教を和解させるためには、新鮮で新しい観点が緊急に必要である。言及したように、既存のイデオロギー/世界観は十分ではなかった。新しい観点が現れなければならない。例えば、先に述べたように、民主主義と共産主義の世界観は共に限界がある。両者を統合し、統合することのできる新しい観点が必要である。この理由で統一思想は「頭翼思想」とも言われる。多くの人々はそのようなレッテルの意味を理解さえもしないのではないかと私は疑う。例えば、私の友人の多くは「リベラリズム」に対して敵対的である。しかし、我々は皆、真の対話の中でお互いから学ぶことができる。我々は『右』と『左』の両方を擁護しなければならない。これは単に知的な方法であるだけでなく、単なる学問的な関心でもない。それらが一体化することが緊急に必要なのである。現在の世界は数多くの紛争や緊張の中にある。Rev. Moon が見ておられたように、核戦争の脅威が存在しているし、北朝鮮、イラク、イランは一瞬即発の危険な地域である。

中東は世界の火薬庫の一つであり、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒が私の平和哲学の中に新しい次元の対話を行う指針を見出した。数十年前、私の統一思想は冷戦を終結するのに決定的な役割を果たした。(21)

これまで繰り返して述べてきたことであり、その重要性を強調してきたので、「新しい真理」、および「新しい観点」の概念に関して、さらに説明させてもらいたい。

### 新しい真理、より一般的には新しい理解、又は新しい理論として理解されているもの

私は科学と宗教の統一を実現するためには、新しい観点の見解が必要であることを論じてきた。

「現代の知的な人々が真理に啓発されるためには、より高度でより豊かな内容の、より科学的な表現方法をもった別の教科書が現れなければならない。我々はこれを新しい真理と呼ぶ。この真理 … は、人々の内的小および外的な無知を克服するために、科学と宗教を一つの統合された取り組みとして和解させることができなければならない。」(22)

我々が直面しているチャレンジはこうである。希望的観測を超えて、この新しい世界観たる統一思想は科学と宗教を一つの統合された取り組みとして和解させることができるか？さらに進む前に、私が指摘しなければならないことは、この課題を担うようになる純然たる論理的知的な力を超えて、我々は人間の感情と価値観的な必要や願望に対して、マクグラスが「驚き」の感覚と記述するものに対して、応えなければならないことである。彼の本の最初には、「我々の大部分は自然の美や威厳に対して心臓が止まるような畏敬の気持ちを知っている。」と書かれている。(23) これらは科学的な言い方ではない！しかし、人間にとって非常に重要な経験である。

その晩私は以前に見たことがないような星を見た。暗く静かな陸地の中に、輝かしく、厳粛で、動かない星を。その夜、経験した圧倒的な畏敬の気持ち — 高揚感、驚き、不思議さ — を言葉で表現することはできない。」(24)

私は青年として科学がとても好きであったが、私には科学は完全ではないという感覚があった。科学は物事の働きを理解するのに役立った。しかし、そうしたことは何を「意味したのか？」科学は私がどのようにしてこの世に存在するようになったかという疑問に対するきちんとした答を与えてくれた。しかし、「なぜ」私がここにいるのかという、より深い疑問に答えることはできないように思われた。人生の要点は何だったのか？(25)

科学は疑問を提起することにおいては素晴らしい。疑問の中にはすぐに答えることができるものもあるし、将来、技術の進歩によって答えられるようになるものもあるだろう。また、科学が答えることは不可能なものもあるだろう。科学が答えることができないことや、科学がいかに発達しても答えられようになることはあり得ないものもあるであろう。(26)

科学が決して答えることができない疑問もあるだろうということを踏まえると、「万人の本性の願望を満たすことができる完全なイデオロギーが現れなければならない、という主張により多くの力が与えられる。」(27) そうした願望は知的な好奇心ではないが、周りの世界に対する感情的な驚きである。要するに、私はこの「新しい真理」又は「完全なイデオロギー」が統一思想であると信じる。この論議にアプローチする仕方はたくさんあろうが、科学者がしばしば熟考する一つの観念から始めたい。それは現在、科学者が自然の諸法則に魅惑されているということである。

## 自然の諸法則の全くの神秘

多くの科学者は、熟考するとき、自然の諸法則が魅惑的な神秘を提供していると告白する。彼らはこれらの諸法則について質問し続けている。これらの諸法則は実際には何なのか？ そもそも何故これらの諸法則が客観的な世界に「存在」するのか？ 彼らは特に、どうしてこれらの諸法則が現実働いているのか？等の質問に魅惑されているように見える。彼らは自然の諸法則が働いているという信じがたい現実に対して、そしてまた、人間の心はその現実を認識することができ、かつそれらの諸法則を研究し理解する能力を完全に備えられているという現実に対する驚きを表明する。アントニー・フリーはスティーブン・ホーキングからの引用を含めて、次のように言っている。

重要な点は、自然には規則性が存在するのみならず、これらの規則性が数学的に正確で普遍的であり、「結びつけられている」ということである。アインシュタインはそれらについて「理性の化身」だと言った。我々が尋ねなければならない質問は、いかにして自然がこのようにパッケージされた状態になっているのかということである。… 現代の多くの著名な科学者が自然法則を神の心の考えと見なしている。… 「たとえ唯一の可能性のある統一理論があるとしても、それは単なる一つのセットの規則と方程式である。それらの方程式に火を吹き込んで、宇宙をそれらが描写するようにしているのは何か？」(28)

正に、興味深い質問である！フリーはさらに続けて言う。「真剣に科学を追求している人は誰も、自然の諸法則が人間の精神よりもはるかに優れたある精神の存在、すなわち我々の控え目な力をもってそれに直面するとき、謙虚さを感じなければならない精神の存在を表わしていると確信するようになる。」(29) フリーはポール・デイヴィースを含む多くの科学者の言説を引用している。デイヴィースは次のように言う。

「科学は科学者が本質的には神学的な世界観を採択する場合にのみ前進することができる。」誰も物理の諸法則がどこから来たのかは尋ねない。しかし、「最も無神論的な科学者でさえ、我々には理解できない自然における法則のような秩序の存在を信仰の行為であるとして受け入れる。… 物理の諸法則は自然の法則ではなく、我々の法則であると思うのは、「どうしようもないナンセンス」である。」物理学者たちは、ニュートンの逆さ引力の法則が文化的な

創造であることを信じないだろう。彼は物理の諸法則は「本当に存在する」の  
であり、科学者の仕事はそれらの覆いを取ることであって、発明することでは  
ない、と主張する。(30)

フリーユはジョン・バローのテンプレトン大学での講演を引用する。「ジョン・バロー  
は、… 宇宙の果てしない複雑さと絶妙な構造は、わずかの単純な法則に支配されている。  
それらの法則は対称性があり理解しやすいものである、と述べている。」 実際、「宇宙全  
体がどのように振る舞うかを示す紙に書かれた小さな走り書きにすぎない数学の方程式が  
存在する。」(31) フリーユは次のようにコメントする。「自然の諸法則は物質のメカニズ  
ムを通して聞かれる合理性の声であるが故に、無神論者に一つの問題を提起する。」(32)

最近(2017年)、学者たちは、すべてが完全に関連している三つの実体が存在するよう  
に見える事実に驚嘆した。1) 物質的な宇宙がある。2) ある法則の体系が、充分「神秘的  
なことに」、その宇宙に完全に合うように(あたかもそのように合うように設計されたか、  
そのように意図されたかのように)存在している。3) 人間の意識が、これも充分「神秘的  
なことに」、それらの法則とその宇宙を理解する能力をもっている。(あたかも「至高の知  
能」によってすべて設計されているかのように)一貫して完全に合っているように見える。

統一思想はこの問題を非常に単純に扱っている。すなわち、自然の諸法則は自然の中に  
「そこにある。何故なら、それらは神的性質(創造者または根源者)の不可欠の側面だから  
であり、神的性質はまた数学的な論理的思考力も含んでいる。それ故、神は宇宙創造の行為  
または過程を通して、自然のすべてにこれらの諸法則を付与したのである。(33) 神が時間  
の最初に設定した原則と法則に従って、神は宇宙のすべてを治める。諸法則は創造の初めに  
宇宙の中に「埋め込まれた」。「我々が自然界に科学的諸法則が隠されていることに驚くに  
つれて、創造主たる神が本当に科学の根源であると推論できる。」(34) 繰り返すと、法  
則は初めから神の心の中に存在していたのである。この事実から神は科学の起源になる。そ  
れ故に、自然の諸法則は物質世界にかくも完全に合うのであり、人間の心はこれらの法則や  
宇宙のその他多くの事実を理解する能力を有しているのである。我々人間は、神の「似姿」  
に創造されており、人間は創造主によってそのような諸法則を理解し、数学の助けをかりて、  
それらの法則を研究することができるように意図されている。それは人間が自分の生きる宇  
宙を理解し、宇宙を愛で治めるためである。このような科学的な知識の故に人間は世界を理  
解し、その中で幸福に生きることが許されるのである。

### 統一思想は外の学術研究や独立した諸研究によって裏付けられる

統一思想が宗教と科学の統一を主張するのは良いことである。それは理論においてもエ  
レガントな世界観である。しかし、統一思想だけに限定した「内部の」議論は、統一思想に  
なじみのない広範囲の大衆にとっては必ずしも説得力がないだろう。彼らにとっては、それ  
はただのもう一つの宗教哲学のように見えるかもしれない。それは公正な批判である。いか  
なる宗教や思想でも自己のものが最善だと信じるものである。この点で、統一思想の中に見  
られるのと同じような多くの議論が外部の、統一思想が提示する理念を知らないか、それを

広めることに關心のない学者たちによってなされつつあることに留意することは重要である。幸いなことに、自分たちの独立した研究に基づいて同じような結論に到達した学者がいる。私は、こうした科学者の何人かについては、すでにアントニー・フリーューによる引用として言及した。彼らの議論と哲学的思索は彼らの前のすべての証拠を考慮した客観的な観察と科学者としての省察に基づいてのみなされているので、統一思想の主張がもっと説得力あるものになる。

そのような議論が登場しつつあることは勇気づけられることである。「神は存在する」(アントニー・フリーュー、哲学者)と「大きな質問」(アリストター・マクグラス)は科学と宗教の問題に深く取り組んで、新たな洞察と新鮮な考慮をもたらした最近の二冊の本である。この論文にとって注目し得る事実は、両方の著者が統一思想の中でかくも体系的にまとめられた哲学的な理念と完全に共鳴しているということである。

### 特定の学術的な観点、および(宗教と科学の間の)紛争物語の終焉

前に言及したように、科学は結果の世界だけではなく、原因の世界を説明するためにはその地平線を広げ、高くしなければならない。多くの科学者はそのような観点を望んでいるように見えるし、彼らの省察はその方向への動きであるように思われる。このことは科学における期待できる発展である。

「純粹に科学的な」観点に留まっている多くの科学者は科学に限界があることをますます悟っていることに注目することができる。ジョージ・グリーンスタイン(「共生の宇宙」の著者)は以下のようにコメントしている。

何か奇妙で今や神秘的に、我々の宇宙は根本的に生命の宇宙であり、生命を真剣にとらえているといってもよい宇宙である。十分な数の人々がその考えを真剣に考え始める時にのみ、更なる証拠があたかも自然発生的に出てくるように飛躍して出てくるであろう…。

もしその考えが正しいとわかれば、考えの大きな思想革命が近い、と言っても過言ではない…。新しく理解できないことは、何らかの尋常でない仕方でも物理の諸法則が自らを生命に一致させており、…何らかの超自然的な存在が関与しているに違いないという考えが即座に起こることである。突然、意図せずに、超越した存在の科学的証拠に偶然に遭遇したということがあり得るであろうか? 科学の発見は神の存在を証明することはできないと私は信じている、現在もまた、これからも。(35)

グリーンスタインは物理学者でありながら、彼の言説が真実であるように聞こえることに留意することは意義深い。しかし、科学の発見は現段階では神の存在を証明することはできないことは本当であるが、科学者たちがますます多くの発見をして、科学理論が発展するにつれて、人間の経験することを十分に説明しようとするならば、神の概念を含むに違いない世界観を指し示すか、それに至るかも知れないことにも留意すべきである。… 科学がそ

うることができるかという疑問は残る。もし科学を行う科学者たちがそうすることができるならば、科学はそうすることができる。アリストター・マクグラスはそのような科学者の一人である。オックスフォード大学で量子力学の教育を受けた彼の科学に対する信任状は非の打ちどころがないように見える。しかし、マクグラスはその著書の書き出しを、夜の星を見上げていたときに経験した「驚き」に注目することから始めている。この「気持ち」が彼をうながして、そのような経験を説明できるように自己の科学の探究を新しい次元、物事を見る新しい方法へと高め、拡大させたのである。私たちが、何人かの科学者の中にはそうすることができる人もいれば、できない人もいると言うのが安全だと私は思う。その違いは彼らの哲学的説得力の違いにある。このことをさらに考えて、新しい無神論を見てみよう。

「紛争」物語は置き換える必要がある。

学術世界には、宗教と科学のこの問題に現在対処しており、違いの解決をもたらすことにはかなり前進している人たちもいることは注目すべきである。マクグラスはそのような学者の一人である。彼は「大きな質問：何故我々は科学、信仰、神について話すことを止めることができないのか？」の著者である。ここで私の個人的なことをつけ加えさせてほしい。かつて自分の省察と疑問に対して、心の中の疑問の多くに非常にタイムリーな答えとなる直接的な返答であるように思われる本が現れた。「大きな質問」はこうした本の一冊であり、あたかも私の質問と関心に直接返答するために書かれたものであるように思われた。その非常に興味を引き付ける本、「大きな質問」の中で、マクグラスは多くの重要な課題を提起し、印象的な論理と洞察でそれらについて論じているが、それでもまだいくらかの不確実な領域を残している。私は、統一思想がこれらの不明確なことにさえ新鮮な洞察をもたらすことができると信じる。科学と宗教の分野間の紛争、この論文の始めにのべた対立のことから始めよう。

マクグラスは「科学対宗教」の物語はそれ自体、「聞き古したもので、時代遅れで大部分が信頼性を疑われている」と指摘することによって始める。(36) それは一つの「社会構造」である。これは多くを物語るものである。何故なら我々はいかに多くの人々が科学の社会学に影響を受けているかを知っているからである。「もし彼がそのように言うなら、それは本当であるに違いない。」しかし、人々が、科学者でさえ、すべての偏向、偏見と誤りが混じって考える風潮は、科学のいわゆる「客観性」に影響を及ぼす傾向があるかも知れないのである。マクグラスはこの「社会構造」、すなわち、それが「科学対宗教」であるという概念について批判的である。何故なら、そのような構造が実際に我々の周りの現実のより完全な姿を形成させてくれる現実の「地図」の形成を妨げるのに役立ってきたからである。紛争というこの概念は、科学と宗教を一つにするための進歩を妨げるように働いてきた。そのような紛争物語は、すべての宗教問題を別にしても、科学自体の発達を妨げたかも知れないと言ってもよいかも知れない。

「いかなるただ一つの物語もそれ自身で人間の存在と経験の複雑さを組織化し、相互に関連させるには十分ではない」と主張するが、「人類の偉大な物語」(彼は“メタ・ナレティブ”と呼ぶ)は「我々の想像力を捕らえ、物事を意味あるものとするのに役立つ概念的な枠

組みを与えてくれる。」(37) 確かに、統一思想は“メタ・ナレティブ”である資格がある。統一思想が提供する観点について（もし研究するつもりがあれば）、マクグラスはどう考えるかな、と思うかも知れない。

科学対宗教の「物語」は、統一思想の中で考慮されている。それは科学と宗教が外的真理と内的真理をそれぞれ追究する人類の努力であるからである。人間の「墮落」以後、これらの領域は分離し、それ以来ずっと、「一見和解できない」ままできた。しかし、ひとたび真理のこれらの二つの面が統合されたら、科学対宗教の物語は「科学と宗教の両立」の物語と容易に言い直すことができることを期待することができる。これらは二つの非常に異なる「物語」である。これらの二つの物語のどちらがより説得力があるかを、特に「知識の社会学」を考慮に入れて考えよう。

### 「科学と宗教の両立性」を含むメタ物語

マクグラスは「紛争」物語を、社会的に構築され、人類がより大きな意味を探究するのを現実に妨げた偽りの物語であるとして効果的に批判する。リチャード・ドーキンズやラルフ・ハッチェンズなどの無神論科学者は、彼らの無神論の動機に関して（正しく）批判され、その結果、科学と宗教の統合のための新しい可能性への道が開かれる。マクグラスは大部分の人々になじみのある、地図、話し、各種レベルの現実などの理解法について話す。我々は皆、自分の人生を生きる手段たる現実の「地図」や「話し」に基づいて生きているのである。

マクグラスは「地図」についてだけでなく、「現実のレベル」と「話し」についても話す。これらすべてが「科学と信仰が人間のアイデンティティについて異なっているが、潜在的に補足的な説明を提供できる」という事実をもたらす。そして、もし我々が人間として栄え、意味ある充実した人生を送ろうとするならば、両方とも必要である… それぞれがより大きい絵の一部であり、もしどちらか又は両方とも除外すれば、人生のビジョンを貧困にしまう。」(38)

「現実是非常に複雑であるので、それを描写するためには一連の地図が必要である。」  
「一枚ではいかなる地図も十分ではない。」(39) これは、科学者が経験するのに必要な態度の変化である。科学は独断的であってはならないし、なることもできない。現実は一つであり、科学と宗教は同じ現実を見ているが、異なったレンズを通して見ているのである。

「『紛争物語』は本質的には特定の社会集団の必要や方針に役立つように発明された社会的「構造」である。それは我々が受け入れなければならない永遠の真理ではない。それは歴史の偶発的存在であって変えることができる。我々は事物をどのように見るかを選ぶことができる。」(40)

これは非常に進歩的な思考方法であることがわかる。マクグラスは自分の本の中で、ひとつの「代替的アプローチ」を提供する。それは「事実、価値、意味、目的を一緒に織りなすことで人生の物語を豊かにしてくれる。(41) 事実、価値、意味、目的について話すとき、

統一思想に非常に適した言語を話している。価値論において、統一思想は事実と価値の問題や意味と目的の問題に直接対処する。これらは孤立した思想として論じられるのではなく、至高の存在の観念を含むメタ物語の切れ目のない文脈の中で見られるように論じられている。価値と意味はマクグラスが人生の早い時期に経験した側面であり、この随筆の始めに引用されたものである。

マクグラスは指摘する。「紛争物語は、それが知的でなく、文化的な理由で魅力を獲得した思考方法の典型的な例であり、継続的な支配を確実にすることに関心がある人たちによって支えられている。」(42) このような紛争物語は、意図的に誤導する物語であり、問題を混乱させるために故意に宣伝され、人々を混乱または誤導するように設計されたものである、と言ってよいであろう。マクグラスがそのような立場を取る二人と特定する個人はリチャード・ドーキンズとラルフ・ハッチェンズである。

既得の関心を持っている科学者の中には「新しい無神論」を推進する人々が含まれる。(43) すべての科学者が真の科学者であるわけではない。科学者たるものは証拠によって導かれる所へと従う必要がある。新しい無神論を擁護する人は科学対宗教の物語に含まれるいかなる種類の精神的または超自然的な次元に対しても反対する偏向を初めから持っている。これは彼らが神または至高の知性、または設計者が存在する可能性さえも受け入れそうにないからである。しかし、彼らの偏見は勝ち目がないように見える。それは証拠を重んじないからである。証拠は人間のための知識の業績を考慮するとき、非常に重要である。まもなく証拠の概念について考えるであろう。「紛争物語は欠点の大きな学術的な証拠の緊張の下でばらばらになってしまう。」(44) 「科学は本質的に宗教に対して賛成でも反対でもない。政治に対しても同様である。」(45) 他方、科学者の中には宗教とそれに伴うすべてに対して明らかに非常に反対する人もいる。科学の本質について、マクグラスに従って、より注意深く見てみよう。

「科学は現実を探究するための決まりを設定することに関するものであって、探究できるものに現実を制限するものではない。科学は決してある種の哲学的な唯物論に専心していることを意味するものではない。唯物論者の中には、科学的説明の成功は存在論的唯物論の内在を意味すると主張する人もいる。しかし、これは単にこのアプローチを解釈するいくつかの方法の一つであるにすぎない。そして、科学者の中で広い支持を得ている他のアプローチも存在する。(46)

前述したように、科学はこの世界の有形の次元に対処するが、原因の世界にはしない。しかし、これはその方法論である。非倫理的でも間違ってもいない。それは単に科学が働く仕方の現実にすぎない。「科学は超自然的なものを否定も反対もしないが、方法論の理由で超自然的なものを無視する。」「科学が現実に関わる方法は、非有神論的であるが、反有神論的なものではない」(47)

方法論として、「科学は超自然的なものを否定も反対もしない。」ただそれを無視するだけである。何故なら、それは現実に関与する非有神論的な方法であるからである。私にとってこれは中立的な立場であり、統一思想が有益な対話に入り、宗教と科学の統合または統一への道を開くことのできる点である。「科学と宗教の境界が歴史的偶発性によって形成

されたことがますます認識されていることは今や明らかである。それぞれの領域は複数の方法で描くことができ、複数の解釈ができるように開かれている。」(48) 「科学と宗教の紛争物語は終わりつつある。我々はこれに線を引いて、それらの関係を理解するより良い方法を探る必要がある。」(49) 私はそのような感情に拍手する。マクグラスの見解は統一思想の立場と非常に一致している。科学と宗教の関係を理解するより良い方法の一つは統一思想自体の哲学的な観点である。アントニー・フリーは、自分が発見した結果についてあまり哲学的な省察をせずに科学の研究を行う科学者たちについて話している。彼は、科学の研究の結果についてそのような省察をし、究極の質問をするのは哲学者の役割であると主張する。科学と宗教の関係を理解する一つより良い方法は、統一原理に表現されており、統一思想の中でかなりの程度まで哲学的に説明されている。意義深いことに、マクグラスはさらに以下のように続ける。

「科学と宗教は今日の世界で最も大きい文化的な勢力の二つである。正しく枠組みされると、相互の会話が豊かになり、高揚する。… そのような会話が起る必要がある。宗教が公衆の生活と話し合いに戻ってくる。ひじ掛け椅子の哲学者やメディアの評論家からのすべての予言にもかかわらず、神は去ってはいないし、精神的な領域に対する興味も無くなってはいない。生気がなく、疲れているように聞こえるのは、今や新しい無神論である。」(50)

マクグラスは、物事を「見る」新しい方法について語り、「科学理論と神学教義の双方とも物事を一定の仕方で見、世界を異なる仕方では想像するための招待状と見なすことができる。」と言う。(51) 宗教哲学者のジョン・ヒックは、「として見る」又は、「として経験する」という概念の中で、異なった方法で「見る」という考えを推進しているもう一人の哲学者である。(52)

統一思想は、「神から始まる」。(「統一思想要綱」の最初の文章) それは確かに物事を見る新しい方法であり、「異なる方法で世界を想像する」ことに門戸を開く。統一思想は神の知的概念から始まり、その観点からすべての考えを発展させる世界観である。

### 感情、畏敬の念、不思議、驚きが科学にさえ戻りつつある。

宇宙の中の人間の場所の最も充実して最も現実的な姿を獲得するために、情熱や感情を含む避けられない要素がある。私はこの随筆の始めに、マクグラスが星を見ながら「感じたこと」のいくつかを引用した。今や彼は科学者として、量子力学(科学)と彼が経験して忘れることができない畏敬の念(宗教)の両方を説明できるメタ・ナレティブを見つけようと努めている。全体的な世界観は両方を説明できなければならない。

科学は「客観的な」研究分野であり、その科学的方法は伝統的に研究者からのいかなる入力、すなわち、主観的な入力、をも排除するように努力してきた。そのような入力は研究の客観的な結果を汚染するのが不可避だという信念のためである。それが今までの自明の姿勢であった。「真、善、美などの長年の固有の価値を追求する中で、科学は主として客観的真理に関心を抱いてきた。」(53) しかし、それは話の全部ではない。著書、「宇宙の中

の生命と心」の中で、物理学者のジョージ・グリーンスタインは、自分の研究の中で、宇宙が示す「微調整」が宇宙の背後にいる設計者を指し示しているように思われると述べている。彼は物理学者として、神の概念を持ち込むことは方法論的に許されないと主張するが、それでも、自分の研究の中で見つけるすべてがその結論を示すように思われると指摘する。グリーンスタインが統一思想を勉強したら、なんと反応するかを見るのは興味深いことであろう。

## 証拠は科学において重要

私は科学的な証拠の議論をこの随筆の終わりまで残してきた。最後に、しかし決して重要性が少くないこととして、証拠が決定的な要因になるものである。科学は証拠に関心がある。科学者が説明し始めなければならない「証拠」の根源の一つは科学者の感情と気持ちである。科学と科学的方法の重要な特徴の一つは証拠に対する信頼である。もしある理論が証拠によって支持されれば、その理論の真実性は強められる。理論が証拠によって支持されなければ、その理論を修正するか、または変更さえもする必要がある。理論を修正もしくは偏向する必要性は、宗教と科学を統一する目標への道を開く。証拠に対するこの要件は知識の性質や理論と証拠や証明との間の関係に関していくつかの重要な疑問を提起する。我々が「知っている」ことが、実際に「真実」であるか否かをどのように確かなものとすることができるであろうか？ マクグラスは証拠の信頼できない理解について注意し、「強制的な証拠」という概念に対して警告する。彼は、強制的な証拠という概念は、「証拠は純粋に客観的な事柄であり、その複雑な主観的な面を認めないものであることを示唆する」と主張する。統一思想はこのことについて彼と完全に同意する。「理論は観察の証拠に対して判断すべきである。…そして、科学は旅の途中にあり、まだ最終目的地には到達していない。」(53) 要するに、より多くの証拠を集めるにつれて、また「観察したものの集まり」を「最も意味あるものとする」ような「大きい絵」又は「理論」を求めて証拠を解釈するにつれて、理論は非常に変化を受けやすいのである。(54)

マクグラスは「科学的理論化を正しく理解するために決定的に重要な」三つの主要な点について述べる。第一に、「どの理論が最善か」について議論がある。次に、「理論は暫定的である」ことを認識する。最後に、「ほとんどの理論は異常性に対処しなければならない。」彼は、「ほとんどの読者は、あらゆる点で宗教の信仰と重要な類似性があることを理解するであろう。」と言う。

三番目の点について、彼が見る一つの異常性とは、「苦しみの存在」の異常性である。(55) これは統一思想が容易に対処する一つの異常性である。苦しみの意味と目的をはっきりと論理的に理解する中で取り扱うからである。

もうひとつの問題は「一つの与えられた理論が最善である」と決定するために用いる「基準」の性質である。マクグラスは、「我々はある理論が正しいし、そう考えるもっともな理由があると信じるが、それらが本当であることは立証できない。」と指摘する。例えば、キリスト教を弁護して、マクグラスは、「キリスト教のもっともらしさは、ただ一つの議論

又は確言に依存せず、理念とテーマの連動したネットワークに根ざしている。」と、指摘する。(56)

アントニー・フリーも科学について基本的に同じ主張をする。「私の関心は化学や遺伝学のあれこれについてではなく、何かが生きているとは何を意味するか、このことが全体として見た化学や遺伝子学の実事の集合にどのように関係しているかという根本的疑問についてである。(57) かくして、宗教と哲学は「さまざまな科学の事実や法則を一つの全体に統合するように企てることによって、また、さまざまな科学の仮定や前提条件を調べることによって科学を助けることができる。」(58)

マクグラスは、「自然を個々に観察しても、キリスト教が真実であることを『証明』しない。むしろキリスト教はこれらの観察を意味があるようにするその能力によって自己を正当なものにする。現象は宗教を証明しないが、宗教は現象について説明する。」と指摘する。彼は、チェスタートンを引用して、「良い理論は、科学的であれ、宗教的であれ、それが提供するイルミネーションの量と我々が周りの世界で見たり経験することを受け入れる能力によって判断される。」(59) かくして、最も良い理論は人間の経験の全体について最も明確に説明するものになるだろう。もしそれが重要な基準であるならば、統一思想はテストを受ける用意がある。何故なら、そのような説明を全く容易に達成できるからである。

マクグラスは、C. S. ルイスが「キリスト教を再発見するようになったのは、主としてそれが想像的かつ合理的な意味をなし、歴史のパターンや個人の主観的体験および自然科学の成功について首尾一貫した説明を提供すると悟ったためである」と述べている。彼は「もし人間の理性の範囲を超えるものがあつたらどうであろうか?」という重要な質問をする。(60)

統一思想は彼の質問に答えて、何か意味のある存在、人間の理性の範囲を超えたものが存在すると述べる。その何かとは神であり、霊界である。「現実を照らす能力は、理論の信頼性の重要な尺度であり、真理の指標である。」(61) もし統一思想が「現実を照らす」ことができるなら、それは「本当」の理論であるとみなすことができる。実際、この主張はそれ自体が科学的方法論に合致し、統一思想の体系の中でなされている。読者は経験に対して理論をテストするように挑戦を受ける。

存在論において…我々は原相論で説明されている神の属性が実際に万物に現れているか、もしそうであれば、どのように現れているかを確かめることができる。もし神の属性が万物に普遍的に現れていることを示すことができれば、原相論の真理性が確かめられることになる。私は、自然科学の業績が神に関する理論の正当性を立証する正にその土台になったことを示すつもりである。(62)

もう一冊、最近の本で言及したいのは、一人の神経外科医によって書かれたものである。その本の題目は、「天の証拠：ある神経外科医の来世への旅行」(63)で、著者はイーベン・アレクサンダーという医師である。彼は負傷して昏睡状態になった。昏睡状態の間、彼が体験したことは、人間の肉体の脳を超える何かが存在していなかったら体験できなかったであろうと後で自覚したという性質のものであった。昏睡状態での体験を否定することができず、彼は神の存在を信じるようになった。かくして、哲学者、科学者、医師、および神経

外科医でさえも、自己のビジョンを広げ、神の实在を含む見えないものの要素を包含するようになりつつある。今や我々に必要なのはすべての経験を説明することができるメタ物語なのである。

## 統一思想

私はこの論文の中で統一思想について言及してきた。さてここで関連した概念のいくつかに直接に対応して、科学と宗教の分野の統合のための私自身の主張を論じさせてほしい。この統合は連体の概念の中で表し、図の中で示すことができる。

宇宙の階層構造は、創造されたように、この図で示されており、すべての科学を統一するためのパラダイムを示している。基本的なパラダイムは四位基台である。各レベルの存在は、次に低いレベル及び次に高いレベルの存在と密接に相互連結している。すべての科学を一緒に統合させるものは、どのレベルの目的もより高いレベルの達成に向けられるという事実である。それは科学者たちが研究室で考え出す仮説である。彼らは実験を設計し、理論をテストする。少なくともそれは彼らに適切な方向を指している。調べるのを導くのに役立つ基礎となるパラダイムがある。それが原相の概念である。

## 原存在者の原相は宇宙内のすべての存在者のためのパラダイム・デザインである。

宇宙のすべてのレベルにそのような秩序ある連結がある背後の理由は、すべての存在が原存在者(神)の原相に似ているからである。原相には、内的と外的の二つの構造があり、このパターンはすべての存在者に複写されている。(図を参照) これら二つの構造とそれらの意味することは、さらなる研究、とくに科学者たちの研究に耐えるものである。

さらに、すべてのレベルの存在者はある理由で密接に相互に連結している。それぞれにはより低いレベルの存在とより高いレベルの存在の両方を支持する目的がある。これらの目的はもちろん二重目的(個体目的と全体目的)の概念の中で詳しく説明されている。かくして、宇宙全体に充滿している単一の統一された目的があると言うことができる。このすべてを包む目的の故に、科学は数学と共に研究で有効に使用できるのである。同じ自然法則が宇宙全体に浸透している。それらはこれらの二重目的からの働きの数学的表現である。前述の図に見られるように、宇宙の諸法則は原相の内的形状に由来する。(図を参照) かくして、神は(原相の概念で示されているように)宇宙全体の存在の構造と法則の基準と起源として存在する。図の中で理論的に観察することができることは、すべての科学と人間の宗教的経験は一つの総合的かつすべてを包含するシステムの中で相互に連結しているということである。ここでは物理学、化学、生物学、心理学、社会学、天文学、天文学、宇宙学、その他を見出すであろう。各レベルの実体は上下のレベルと密接に連結しており、あらゆるレベルの目的はより高いレベルを支えることである。

マクグラスは、「いかなる単一の思考方法もそれ自身で宇宙の意味について説明するには充分ではない。」と断言し、「いかなる単一のメタ物語も、それ自身で人間の存在と経験の

複雑さを組織し関連させるには充分ではない。」と主張する。(64) 私はどちらかといえ  
ば、不同意である。統一思想を一つの「メガ物語」とみなすなら、明確なことは統一思想に  
はこれを達成する潜在可能性があり、証拠がその主張を正当化するかどうかを見るために、  
現実に対して理論（本当の科学的方法）をテストするように読者に挑むものである。統一思  
想は人間が経験するすべての領域、核科学から星を見る時に感じる畏敬の念まで、一様に対  
処する。すべての存在者の二重目的についての観点において、すべての科学をいかにして一  
つのシステムの中に統合できるかが理論的に示されている。これが諸科学の真の統一である。  
さらに、人間の宗教的/霊的/超自然的な経験を含む多面的な経験がそのシステムの他の部分  
と統合される。統一思想は、多くの哲学者や宗教者、および科学者が探し求めてきた正にそ  
の世界観であるかも知れない。それは壮大なビジョン、大きい絵、メタ物語、究極の物語、  
最善の理論、最も包括的な地図を提供する。それは、究極の質問に対処することを恐れず、  
大胆に「現実の全体像」を提示する。(65) 意義深いことに、それには理路整然とした神の  
理論が含まれている。

「意味を求める人間の探究」、「アイデンティティ、価値、目的、および媒体」の追求  
(66) が統一思想において実現する。神の考えでもって、科学と宗教間の発展しつつある関  
係を育てることの実現可能性が「次」の大きな質問である。この理論をテストして、それが  
あらゆる人間の必要に応えるものであるか否かを自分で見るように皆が招待されているので  
ある。

#### Footnotes:

1. Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity, *Exposition of the Divine Principle*, (New York: HSA-UWC, 1996), 3.
2. Ibid., 6.
3. Titus, Harold M., *Living Issues in Philosophy*, (New York: American Book Company, 1953), 108.
4. HSA-UWC, *Exposition*, 6.

5. Unification Thought Institute, *Essentials of Unification Thought*, (Japan: Unification Thought Institute, 1992), 132.
6. HSA, *Exposition*, 333-34.
7. Ibid., 334.
8. McGrath, Alister, *The Big Question: Why We Can't Stop Talking About Science, Faith and God*, (New York: St. Martin's Press, 2015), from the cover flap.
9. HSA, *Exposition*, 343.
10. Ibid.
11. Unification Thought Institute, *Essentials*, 224. (emphasis mine)
12. HSA, *Exposition*, 3.
13. Ibid., 6-7.
14. Unification Thought Institute, *Essentials*, 223.
15. HSA, *Exposition*, 352.
16. Ibid., 364.
17. Ibid., 365.
18. Ibid., 406.
19. Ibid., 3-4.
20. Unification Thought Institute, *Essentials*, 132.
21. Family Federation for World Peace and Unification, *Messages of Peace*, Korea: Family Federation for World Peace and Unification, 23.
22. HSA, *Exposition*, 104-05.
23. McGrath, *Big Question*, 1.
24. Ibid.
25. Ibid., 3.
26. Ibid.
27. HSA, *Exposition*, 376.
28. Flew, *There Is A God*, 96.
29. Ibid., 102.

30. Ibid., 107.
31. Ibid., 108-9.
32. Ibid., 111.
33. Unification Thought Institute, *Essentials*, 23-4.
34. HSA, *Exposition*, 10.
35. Greenstein, George, *The Symbiotic Universe: Life and Mind in the Cosmos*, (New York: William Morrow and Company, Inc.), 27.
36. McGrath, *Big Question*, 16.
37. Ibid., 46.
38. Ibid., 47.
39. Ibid., 42.
40. Ibid., 17.
41. Ibid., 17.
42. Ibid.
43. Ibid., 15.
44. Ibid., 18.
45. Ibid.
46. Ibid., 19.
47. Ibid.
48. Ibid., 20.
49. Ibid.
50. Ibid., 21-22.
51. Ibid., 22.
52. Hick, John, *God and the Universe of Faiths*, (New York: St. Martin' s Press, 1973), 37- 52.
53. Titus, *Living Issues*, 107.
54. McGrath, *Big Question*, 51f.

55. Ibid., 57-59 passim.
56. Ibid., 67-69.
57. Flew, *There Is A God*, 90.
58. Titus, *Living Issues*, 303.
59. McGrath, *Big Question*, 69-70.
60. Ibid., 70-73.
61. Ibid., 74.
62. Unification Thought Institute, *Essentials*, 41.
63. Alexander, Eben, *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife* (New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2012).
64. McGrath, *Big Question*, 46.
65. Ibid., 45.
66. Ibid., 41-42.

**References Cited:**

Alexander, Eben. *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife*. New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2012.

Family Federation for World Peace and Unification, *Messages of Peace*, Korea: Family Federation for World Peace and Unification, 2007.

Flew, Antony. *There Is A God*. New York: HarperCollins Publishers, 2007.

Greenstein, George. *The Symbiotic Universe: Life and Mind in the Cosmos*. New York: William Morrow and Company, Inc., 1988.

Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. *Exposition of the Divine Principle*. New York: HSA-UWC,

1996.

Hick, John. *God and the Universe of Faiths*. New York: St. Martin' s Press, 1973.

McGrath, Alister. *The Big Question: Why We Can' t Stop Talking About Science, Faith and God*. New York: St. Martin' s Press,

2015.

Titus, Harold M. *Living Issues in Philosophy*. New York: American Book Company, 1953.

Unification Thought Institute. *Essentials of Unification Thought: The Head-Wing Thought*. Japan: Unification Thought

Institute, 1992.

Unification Thought Institute. *New Essentials of Unification Thought*. Japan: Unification Thought Institute, 2005.